

林の手入れと手応え

草薙 健

地域の林は、今、どうなっているか

身近な距離に手ごろで素敵な林があれば良い、と思ったことはありませんか？きっと日本独特の手入れをされた里山や欧州のすっきりした森の道などをご覧になって、憧れをもった方は多いはず。遠くにある超一級の国立公園の自然とはまた違う、毎日でも付き合える林、まさに身近な林です。そうやって見回してみると、身近で快適な林は意外なほどなくて、そんな林がある暮らしそのものを願うことすら忘れていたことに気づきます。では、各地の多くの林はどうなっているのでしょうか？その多くは恐らく「放置」「そのまま」。手入れされた林の快適さを示してくれる林の持ち主がいないこと、そしてわたしたちの感性が放置された林に慣れてしまった結果、本来の林の美しさ(特に広葉樹林)、心地よさから遠く離れてしまったことなどが積み重なって、地域の身近な林は今、生業としても市民がアクセスする場としても行き詰まっているのが現状だと思います。

林を手入れする担い手は、今、誰なのか

こういうのも、実はこと林について言えば林はその(土地)所有者だけのものではないのではないのか、という基本的な疑問があります。市民の生活に身近な林となれば、法的には所有者のものであっても、林のもたらす効用は同時に地域の生活者のもの、つまり考え方としては「林はみんなのもの」という考え方に立った方が今よりはるかに快適な地域社会と地域環境を創っていくことができる。それを個人所有の権利があまりにも強く保証されてきたがゆえに、また一時期大きな利殖の可能性を含んでいたがために、所有者自身も誰かよその人に担い手を肩代わりしてもらう道を選べないでいる、それが身近な林の現状ではないでしょうか。

また、地域に生活するわたしたちも身近にある林を、「所有者が的確に手入れしていい環境を地域に提供する義務がある」などと、固いことをいう時代は過ぎたと言っているでしょう。市町村の公共の林ですら、役所が自ら荒れた林をなんとかせよ、という前に、担い手は住民が中心になって風景を創って行くしか、適当な方策がない、と見極めた方が良さそうです。実際、わたしたち市民は、そこに気づき始めています。そして住民は林の手入れに参加できる仕組みを手に入れる必要があります。しかもそれは可能です。

ではどう手入れすればいいのか

ここまでは地域環境に関心を持っている方ならたいていどり着いた結論かもしれません。札幌市の都心部や住宅地の多くではまとまった身近な林を求めるのは無理ですが、そうだよなあ、と読んでいただけた方も少なくないのではないのでしょうか。問題はここから。ここから少し

面倒な応用問題に入ることになります。地域のボランティアとして放置された広葉樹林の手入れをするという前提で以下述べてみましょう。なぜなら広葉樹は勝手に生えてくるので放置されやすいことと、ガーデニングのような手応えがある格別なものだからです。身近な林(=広葉樹林)がもし荒れているなら、どうやってそれに取り組んでいけばいいのか。そこには大きく分けて次の3つのポイントがあります。

ひとつは、所有者との関係。「森はみんなのものだ」などと単刀直入にぶつかっては門前払いにされても仕方ありません。現行の法制度の下では、その森林所有者と粘り強くお付き合いし信用を得て、所有者と利害が一致しギブアンドテイクが見えるところまでたどり着くことがどうしても欠かせません。

二つ目は制度上のクリアです。森林はしばしば森林法の網のもとにあり保安林ならば知事の許可、普通林なら伐採する前に届けが必要な場合があります。自治体の指定する緑地もあるので、その森林にかぶせられている制度の網を調べてそれに適切に対処すること。これは道庁の森づくりセンターなどに相談できます。

三つ目はいいよ手入れする技術です。これはどこでも通用するマニュアルがどこかにドーン待っている、とは考えない方が得策です。例えば旭川の森林とわたしのフィールドの苫小牧では樹種も樹木の扱いも違うと思ったほうがいいのです。違うから、共通する基本を勉強しながらもそこ固有の特徴に精通していくしかありません。奉仕作業か生業かでも扱いは大きく違います。

「林をみる力」と「手入れの how to」



そして技術という場合には、「林をみる力」と「手入れの how to」が存在します。「林を見る力」とは一朝一夕に身につくもの

ではありませんが、多くの林をみて歩き、風致体験を積んで、整った美しい快適な林のイメージを自分なりに持つことが近道になります。林の手入れは残す樹木と切るものを選別することから始まりますが、その林がどういう構成(樹種、密度、太さ・高さの分布など)なのかを自分なりの方法で記録を残すことが大事です。そうすることによって、もとの姿、作業経過の履歴を誰にでも伝えることができるようになります。

「手入れの how to」でわたしがまず初めての方にお話しするのは「林は壊れない」ということ。「切ることは悪い

ことだ」という思い込みのせい、あるいは殺生のように考えて良心がブレーキをかけるのか、効果的な抜き切りにたどり着かないことが多いのです。思い切って切る。これは、前に述べた森づくりセンターに相談して「密度曲線」を使った検定してもらいちょっと科学的なアプローチもしておくといいでしょう。そうすると、わたしたちがよかれと思って穏便に間伐するそのことが、林の成長にとってほとんど無意味で無力であることを知らされます。そうこうして少しずつ、美しく手入れして、かつ、林を壊さないという自信をつけていくのです。

このように理論的なアプローチを自主研修のような形で学びながら、やはりその林固有のマニュアルを求めることとなりますが、わたしの選木基準はやがて「枝先の枯れ具合」に求めるようになりました。ミズナラやコナラをはじめフィールドのほとんどの樹木は、混んで枝先が触れるようになると枝から枯れ始め、やがては太枝全体が枯れ落ちます。枝先が触れるストレスは、これ以上繁茂しても意味がないという諦めのシグナルを出して、樹木はその枝を見捨てる。どうもそんなシャイなところが、本州のシヤカシなどの常緑広葉樹と北海道の広葉樹では全く違うのです。だから、林で上空を見上げて、枝の関係がどう錯綜しているか、どちらを抜き切りすればいいのか、というのは自ずと見えてくるのです。

チェーンソーワークなどは、比較的身近な森づくりNPOなどにアクセスすれば必ず教えてくれるイベントやつながりができるものです。実践と座学を繰り返し、実力をつけます。怪我をしないで抜き切りし、ひとまず薪づくりをゴールにすれば、人力という一馬力でどれほど材を生産できるか、全身全霊で実感ができるものです。

手入れの醍醐味

ここまで、身近な広葉樹林をどう手入れするかを個人的な経験を基にして簡単にあらすじを書いてみました。正確に言えば、わたしのようなサラリーマンが、週末だけ山仕事の真似事をするという素人の手引きです。ブルドーザーや集材機を駆使する林業とは一線を画した、人力主体の森づくりです。驚沢なことに、現在はコナラを主体とした雑木林だけを対象にしていますが、そんな環境のもとで四季を通じた年間ほぼ50週近く、チェーンソーとブッシュカッターを夏冬交互に持ち替えてする作業は、醍醐味と呼ぶべき媚薬を備えています。

それはまず、心地よい環境が確実に生まれるという達成感。2番目には、そこがフリーアクセスが許された場所なら、確実に人々に広まり、人々が集まってくるという事実も、作業する者には大きな励みです。3番目には、風土とのつながり感覚。これはとても大事な手ごたえとして挙げなければなりません。人は、理屈や知識を脇におき手を動かす単純な仕事、いわば手仕事をすることによって、現代人特有の考えすぎる性癖から束の間開放されます。危険も伴うチェーンソーを使った仕事や刈り払い機の無心の運転のさなか、しばしば人は無心になって冥想

状態に到達します。これは予定外の効用と言えるでしょう。

薪でつながるコミュニティと持続可能性

身近な林を手入するということは、考えてみるといろいろなやることがあり、老若男女多くの人がかかわりを持つことができるということで画期的なことです。ブルや集材機などなくても、荒れた景観にしている込みすぎた樹木、傾斜木、風倒木、ツルに絡まれて呻いている木を整理しただけで、何十軒分もの冬の暖房用薪が誕生します。ということは、わたしたち市民でも身近な放置林を手入することが、やりようによっては可能なのです。ちなみにわたしのフィールドでは今季、老若男女のべ300人の人力で、20軒分近い薪を作り出しました。



そのためには安全で確実な作業ができるという安心感もてる約束を土地所有者とするのがスタートですから、ある意味、ハードソフトの両面をレベルアップするのは不可欠になります。が、この応用問題に時間をかけて積み重ねること、そ

のものが喜びになるはず。また、こうして進めていく個人やグループの地域貢献活動は、「風景の改善」という点に集約されて目に見えてきます。また、薪をゴールにすると、石油にばかり頼らないで、地域に捨てられて腐らせてきた樹木を燃料に拾い上げエネルギーを再生産できる循環の輪に入った喜びも付いてきます。

環境と身の回りの整理整頓は、公共など誰かにやってもらう時代は終わりました。と同時に、身の回りの「他人の林」も、これからは、地域みんなで工夫をしてケアしていく時代になったと言えます。そこでは、東北の大震災時に海外から賞賛された地域の助け合いの気持ちなどを掘り起こして行けば必ず可能だと思います。



薪作りをゴールにして林の手入れを始めて気がついたことは、薪に思いがけない求心力があるということでした。

薪のためにコミュニティができ、あるいはコミュニティが参加するという現象も起きます。身近な放置林がみんなの共有財産になり持続できる、これが新時代のチャレンジなテーマといえます。(草薙)

*この原稿は札幌市の園芸ハンドブック用に書かれたものです。